
-恋-

楓光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 恋 -

【Nコード】

N4952I

【作者名】

楓光

【あらすじ】

お母さんが亡くなった……。私が泣いているところにある男の子がきた……。私の……。私の子……。私の……。大好きな……。男の子……。

・告白・

お母さんが亡くなって二年が経つ。私は18歳、お兄ちゃんは20歳になった。お父さんはいつも働いていて忙しいからほとんど帰ってこれない。だから家にはほとんど私とお兄ちゃんだけ。お兄ちゃんも大学があつたりバイトがあつたり。私は学校から帰ったらバイトもあつて友達とかとあまり遊ばない。お母さんは私たちが幼い頃に亡くなったから顔は写真でしか見たことなかった。

「お兄ちゃん。今日はバイト？」

「ああ。お前もだろ？」

「うん。じゃあ学校行ってきまーす。」

私は遅刻が嫌いだから早めに出る。そうするとクラスで一番頭が良い男子に会う。次第にその子にいつの間にか引かれていた。今日もその子に会ったから話しかけた。

「おはよう。賢くん。」

「おお、おはよう。いつも早いな。」

「遅刻嫌いだからねー。あっ今日英語の宿題あったんじゃない？賢くんやった！？」

「俺はやったよ。見せてあげよつか？」

「あ、マジで！？ありがとー！！」

学校に着いた二人はいつも二人きり。英語のノートを貸してくれて写し終わった。

「賢くんありがとう。助かったよ。」

「いいえー。．．．．．なあひかり．．．俺．．．．．」

「え？なに??」

賢くんが近くに寄ってきた。私はドキツとした。でも、一人の男子生徒が入ってきた。

「よお。いつも早いなお前らは。」

私たちはすぐさま離れた。顔が赤くなるのが分かる。

「お、おはよう。」

私たちは自分の席についた。そして少しずつ生徒が入ってきて、ホームルームが始まった。

「今日は四時間で終わるからなー。みんな午後は遊びに行かないように。」

これでホームルームは終わり。でもなぜ今日は午後の授業ないのだろうか。それが頭を横切った。

それから賢くんとはまだ一言も喋っていない。結構気まずい……。賢くんはクラス一人気者で私はそんな賢くんに憧れ……。好きになっっていた。

でも賢くんはそんな私の気持ちに気づいていない……。と思う。

午前の授業、ホームルームが終わり、みんな帰る支度をした。私はこの後バイトだ。

急いで準備をして帰ろうとすると、賢くんが話しかけてきた。

「ちょっと・・・この後いいか?」

「え．．ごめん．．．これからバイトなんだ．．。」

「少して終わるから。お願い。」

「うん、分かった．．．。」

私たちは近くの公園に行った。そしてベンチに座り賢くんが話し始めた。

「．．．今朝、俺がなに良かったかわかるか．．．？」

「え．．．ううん。わかんなかったけど．．．。」

黙って私を見つめる賢くん。

．．．．．？

．．．．．

．．．．．。

．．．え．．．賢くん？

私は目を疑った。賢くんが私を抱いてる．．．

・返事（前書き）

・・・賢くんがこんなに近くに・・・。

ドキドキが止まらない・・・。

どうか・・・ドキドキ止まって・・・。

・返事・

「賢くん……?」

「俺は……お前が好きだ……。」

「え……。」

絶対に報われない恋だと思っていた……
絶対に叶わない恋だと思っていた……

「賢くん……。私も……貴方が好きな……。」

「え!? 本当かつ?!」

「うん。貴方が好き。貴方じゃないとダメなの。」

賢くんは私の肩を放して、ガッツポーズをしていた。

「付き合ってくれるか?」

「……うん。もちろんだよ。」

「よっしゃー!!!」

「ありがとう。」

「なんで??」

「私、男の子と付き合ったことないから……告白されたこともないから……。本当にありがとう……。だよ……。ありがとう。」
私は賢くんを抱きついた。

そして今日から私たちは付き合うようになった。いつも一緒に学校へ行っている賢くん。貴方は悲しみの中から私を解放してくれた。

「ひかり……。」

賢くんは強く抱きしめ返してくれた。

こんなに私を愛してくれてる人がいたなんて思ってもいなかった・・・。賢くんのことを長く想い続けていたから嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

「これからデートするか？」

「いや・・・これからバイトだったんだ・・・！忘れてた！！急いで行って来るね！！またメールするから！！」

「おう、頑張れよ。じゃーな。」

そういつて私は走ってバイト先へ向かった。

・・・バイトも終わり賢くんにもメールを送った。

（賢くんこんばんは。今日はありがとうね。明日も一緒に学校へ行くからね。）

・・・いつもすぐに返ってくるのに何時間経っても返ってこない。

どうしたんだろう・・・

・・・そしたら賢くんからメールが来た。

読んでみると・・・シヨックだった。

・・・そんな・・・賢くんが・・・！！？

・事故 そして愛の力・

賢くんのお母さん（奈良さん）からのメールで

（賢は今事故に合つて意識不明の重態です。アナタの事を前から賢から聞いていたのでメールしました。今から来てくれますか？見守つてやってください。お願いします。）

・・・今さつき放れたばかりなのに!?

私は今まで走つたことのない速さで走つた。

「賢くんのお母さん（奈良さん）!!!」

「あら。来てくれてありがとう・・・。」

「あの・・・賢くんは!？」

息を切らしてそう叫んだ。

「まだ意識が戻らないのよ。傍に行つてあげて？」

「はい・・・。」

病室に入り賢くんの手を握つた。

変わり果てた賢くんを見て、涙が止まらなかった。

「・・・ひかり、か・・・?」

事故から初めて目を覚ました。

「あ・・・賢、くん・・・!!大丈夫なの!？」

「ああ・・・なんとかな。母さんは・・・?」

「いるよ。病室の外に。呼んでこようか?」

「いや、良い。ひかりと二人でいたいから。」

「でも意識戻ったって言わないと……」

「じゃあお願い。」

私は賢くんのお母さん（奈浪さん）に伝えに行った。そしたら奈浪さんは走って病室に向かった。

「恋の力って……すごいわね。」

「奈浪……さん？」

「アナタを呼んだら賢は目を覚ました。これは……すごいことよ。ありがとう。」

「あ、いえ……そんな……」

「もう遅いから帰りなさい。おうちの方も心配してるわ。」

「はい、ありがとうございます。」

私は賢くんに手を振って病院を後にした。

家に帰る途中涙が止まらなかった。

家に帰ってご飯も食べずに自分の部屋に行き、泣いた。

それから一週間後、賢くんは容態が急変し永遠の眠りについた。

私はお通夜などに行っただが……泣きっぱなしでちゃんとさよならが出来なかった。

それから一度も恋をしていない。

あの恋が忘れられないから……

あの恋を忘れたくないから……

あの恋を消したくないから……

私の大好きなものを神様はどんどん奪っていく……。お母さん、そして賢くん……。

神様なんか嫌い。

大嫌い。

返せ、私の宝物……。

家族、そして恋人、仲間、友達、これ以上奪わないで、神様……。
お願いします……神様……。

お願い……します。

・事故 そして愛の力・（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。つまらなかったでしょう……。小説を書くの好きですがこうというのは初めてなのです。

私の小説を読んでくださって本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4952i/>

-恋-

2010年10月26日05時31分発行